

祭り文化を伝えるか？

地域の歴史や伝統を核にして、
単なるイベントではない、
新しい「祭り」が生まれている。



おけと人間ばん馬

過疎の波に見舞われる中、「心の過疎にはなるまい」という思いから、置戸町商工会青年部のメンバーたちが、「おけと夏祭り」のメイン・イベントとして、1977年から開催。かつて馬が曳いていた材木を積んだそりを、五人曳きと七人曳きのチームに分かれて曳き、速さを競う。置戸町外からも多数の参加があり、重量を減らしたそりを地元の小中学生、高校生が曳くレースもある。1987年サントリー地域文化賞受賞。



山の神を祭る置戸神社の宮司による神事。



開会式で打ち鳴らされる勇壮な山神太鼓。人間ばん馬が始まった翌年、1978年に誕生。スタート当初は、中が空洞になった丸太を利用した手作りの太鼓だった。

と感しました」
一九九六年、第二〇回人間ばん馬大会より毎年ひとつずつ、伝統的手法で作られた丸太の鳥居が、山の神に奉納されるようになった。

「森のなかで、先人の残した十数本の鳥居が人知れずひっそりと建っているのです。中には朽ち果てたものもあります。その光景に直面したとき、これを皆に見せなければ、本当に山の仕事の文化を伝えることにはならないよな」と感しました」
一九九六年、第二〇回人間ばん馬大会より毎年ひとつずつ、伝統的手法で作られた丸太の鳥居が、山の神に奉納されるようになった。

「かつては作業で山に入る時、安全祈願の為に、現場でこのような鳥居を毎回ひとつ作ったそうです。辺りで一番ユニークな鳥居について、オケクラフトの作家である岩藤孝一氏が説明してくれた。」
「かつては作業で山に入る時、安全祈願の為に、現場でこのような鳥居を毎回ひとつ作ったそうです。辺りで一番ユニークな鳥居について、オケクラフトの作家である岩藤孝一氏が説明してくれた。」

「かつては作業で山に入る時、安全祈願の為に、現場でこのような鳥居を毎回ひとつ作ったそうです。辺りで一番ユニークな鳥居について、オケクラフトの作家である岩藤孝一氏が説明してくれた。」

が祝詞を捧げる。台車の上には御神体に重ね六本の鳥居が建てられているが、この鳥居が非常にプリミティブな形態で面白い。
ユニークな鳥居について、オケクラフトの作家である岩藤孝一氏が説明してくれた。

置戸町の人間ばん馬は、丸太を積んだバチと呼ばれるそりを、馬に代わって人間が曳き速さを競い合う。町内はもとより近隣の地域からも、力自慢の男達がこの日集結する。
一九七七年、バチ曳き合戦という呼び名で始まった人間ばん馬は、単なるイベントではない。置戸町商工会青年部の若者たちが、林業で繁栄した町の独自の文化を後世へ伝えたいという願いを込めて始めた祭りだ。その伝えたい文化とは何かを体験すべく、初夏の

北海道東部、置戸町では、人間ばん馬なる祭りが毎年開催される。ばん馬とは、農耕や運搬作業に使役されるばんえい馬のこと。サラブレッド等の軽種馬とは対照的な、がっしりとした無骨な体型が特徴だ。ばんえい馬に重りを載せたそりを曳かせ、障害を設けたコースで競争するばんえい競馬の競技自体をばん馬と呼ぶこともある。
置戸町の人間ばん馬は、丸太を積んだバチと呼ばれるそりを、馬に代わって人間が曳き速さを競い合う。町内はもとより近隣の地域からも、力自慢の男達がこの日集結する。



北海道へと飛んだ。
女満別空港から車で一時間半。オホーツク海へと注ぐ常呂川の最上流に、大自然に囲まれた人口三五〇〇人の小さな町、常呂郡置戸町はある。
山間の国道を抜け、町の中心部へと向かうと、小規模だがよく整備された街並が現れる。道路脇の歩道には色とりどりの鮮やかな花が植えられている。公民館に隣接した大きめのサッカー

グラウンド程の広場が、人間ばん馬の会場だ。ここはかつて山から切り出した木材の集積場として使われていた場所で、ばん馬を開催するのにこれほど適した所はないだろう。全長約八十メートルのコースには、二カ所の障害(二・二メートルの高さに土を盛ったスロープ)が設けられている。
大会当日、開会式に続いて山神を祀る神事が執り行われる。台車に載せた御神体をコース中央へ運び込み、神主



(上)7人曳き予選レース。先頭を走るのは、美幌駐屯の陸上自衛隊チーム「カイルキオーIIIセイ」。無敵を誇った時期もあるが、決勝戦で敗退。(下)今年初参加のポッキーズは、池田町職員有志。



神事が終わると楽しくも激しい人間ばん馬大会の始まりだ。選手入場の行進は、力自慢を絵に描いたようなガタイの良い男達の集団もいれば、なぜかスレンダーな若者ばかりのチーム(チーム名はポッキーズ)、職場の仲間同士とおぼしきチームなど、バラエティに富んでいる。

パンという合図の音と共にレースがスタートすると、男達に曳かれた数百キロの丸太が、砂塵をあげながら目の前を豪快に滑っていく。各チームの丸太には、ばん馬を操る御者役の女性がそれぞれ一人ずつ跨がり祭りに華をそえる。

今でこそこうして女性も参加して楽しめる祭りになったが、山神祭りゆえ、女人禁制という山仕事の風習に従い、当初は女性の参加は一切認められなかった。

置戸町商工会青年部の部長で、造材

および製材業を営む三好秀氏が、先代から聴いた昔の話をしてくれた。

「親の世代は山の中の飯場に何日も泊まって働きました。山で働く男達はなしの気性が荒く、喧嘩が絶えなかつたそうです(笑)。皆、根はやさしいのだが喧嘩っ早い。まあ命を掛けた仕事でしたから、気持ちには分からなくてもないですが。実際、毎年何人かは丸太にはねられ亡くなつてましたからね。森で木を切り出すとき、ドバで丸太を積み上げるとき、危険はいつもすぐそこにありました」

独特な文化や風習は、厳しい仕事環境で必然的に生まれたといつても過言ではないだろう。

チームを構成する人数によってレーズは五人曳きと七人曳きに分けられ、それぞれ予選は三〇〇キロ、決勝では五〇〇キロの丸太を曳く。ひとりあた

りが曳く丸太の重量は、七人曳きの予選で四三キロ、決勝で七一・四キロの計算だ。これでもかなりの重さだが、五人曳きの決勝ともなると、一人あたりの負荷は一〇〇キロに及ぶ。

あまりのハードさゆえか、近年では五人曳きレースに参戦するチームがなかなか集まらないと聞くが、逆に三十数年間毎年出場し、かつ連覇を果たしてきたチームもある。秋田集落という地区の住民によって構成されるアキタホマレである。今年の五人曳きレースも彼らが優勝をさらった。

チームメンバーの一人、農業に従事する二十代の篠木雄一郎氏は、ばん馬に懸ける想いを熱く語ってくれた。「子供の頃からばん馬を見てきて、大きくなったら絶対自分も曳くぞと思っ



5人曳き決勝レース。3本の丸太の総重量は500キロ。写真は、置戸町内の同級生グループ「オトコマツリーズ」。

ていました。練習は「ぶっちゃけて」言えませんが、そうしないと勝てません。しかしウエイトトレーニングはしません。筋トレで勝てるならマッコヨな人が優勝してしまうはずですが、体は大きくなくても練習をすれば勝てるのです。だからひたすら曳き続ける」

驚いたことに、このチームでは練習用の丸太を自分達で用意し、日々鍛錬を重ねているという。



午後からの決勝戦には、町内から大勢の見物客が訪れる(上)。場内には実況中継のアナウンスが流れ、人馬券、人馬新聞に予想屋も登場する。

客もただの見物人ではなくアクティブな参加者として祭りを楽しみ、町全体がひとつになって一日を遊び倒す。

人間ばん馬の創始者で、当時の商工



上下とも置戸町秋田地区の青年たちによる「アキタホマレ」。ゴール直後は息も絶え絶えだが(下)、3連覇を達成し大喜び(上)。昨年は7人曳きも制し、二冠。優勝賞金は5人曳き50万円、7人曳き20万円。

人間ばん馬でレースが最も盛り上がるのは、二カ所の障害を越えるシーンと、やはりゴールだろう。鬼の形相で大地に倒れ込むようにゴールインする男達。場合によっては一回戦で体力を使い果たし、決勝では著しくスピードが落ちたり、途中で動けなくなりリタイアするチームもあるという。

「決勝戦の為の余力を残して走るなんてことはしません。そんなことをしたら悔いが残る。常に全力でした」

笑いながらそう話してくれたのは、過去に何度も出場経験のある、商工会青年部OBの西島勝司氏だ。勝つ為の計算よりも、全力であることにこだわるといふ姿勢からは、人間ばん馬はイベントやスポーツゲームではなく祭りなのだ、という想いが感じられる。

コース上で肉体の限界に挑む死闘が繰り広げられている頃、観客席はというと、こちらも大盛り上がりを見せている。

会場では人馬券なる馬券が配布され、人々は本場の競馬さながらに勝負を予想し投票する。見事予想が的中すれば、券と引き換えに地元の特産品を受け取れるので、どの顔も真剣だ。競馬新聞ならぬ人馬新聞がバラまかれ、何やら怪しい予想屋まで現れる。ここでは観

会青年部長であった故山本佳一氏は、次のようなことを書き残している。

『工作機や重機のまったくない時代、山仕事で頼りになるのは相棒の馬と人間の知恵だけだった。山男は、馬と力を合わせて、ブルドーザーやトラックと同じくらいの仕事をしていた』

バチ曳き合戦は、厳しい山仕事の合間に、力自慢の男達がささやかな娯楽にしていた遊びをまねたものだという。置戸町の人間ばん馬の熱気からは、機械の力に頼らずとも、人間が知恵と体力を駆使して逞しく暮らした時代の楽しさが伝わってくる。

日々の仕事や生活の動作のなかで磨き抜かれ鍛え上げられる身体能力は、スポーツジムのウエイトトレーニングでは得られない。全力を尽くして丸太を曳く男達の姿に、林業で栄えた町の歴史と文化に対する誇りを感じた。



白い木地に木目が美しい「オケクラフト」を町で開発し、特産品になっている。人間ばん馬の優勝杯は岩藤孝一氏の作品。



木遣り保存会。重機のない時代、トビー本で重い木材を自由に操った山の男たちの技を継承している。

連絡先：置戸町商工会
〒099-1131
北海道常呂郡置戸字置戸456番地の1
TEL:0157-52-3520 FAX:0157-52-3523